

『ローマの信徒のみなさんへ』私訳（I）

阿 部 包

新共同訳聖書¹で表題が「ローマの信徒たちへの手紙」となっているこの手紙は、異邦人の使徒パウロの最も長い手紙であり、同時に最後の手紙となったものである²。彼の手紙は、いずれもその都度の具体的な状況の中で持ち上がった諸問題に対応すべく書き記されたものであるが、この手紙はその中でも些か特殊な条件を備えている。他の手紙の名宛教会の信徒たちがいずれもパウロ自身が宣べ伝えた福音を直接受け入れた人々であるのに対して、ローマの信徒たちは直接にはまだ彼を知らなかった。使徒は、それまでの宣教者としての困難に満ちた経験を十分に踏まえて、言わば人類にとってのキリスト体験の意味を、まだ見ぬローマの信徒たちに向けて徹底的に語ろうとした。結果として、この手紙は後にキリスト教として独自の歩みを展開することになる宗教運動が、後に続くその長い歴史の中で福音書と並んで常に立ち帰ることになる原点となった。

この私訳は、三回に分けて掲載する予定であるが、今回はそのうちの1章から5章までである。翻訳に際して心がけたのは、主として、原文のコイナー・ギリシア語本文³と対照しながら読んで分かり易いこと、日本語としても自然に論理展開を追うことができること、である。訳注はページ毎の脚注形式で付すが、必要最小限にとどめる。

¹ 共同訳聖書実行委員会『聖書新共同訳——旧約聖書続編つき』日本聖書協会、1987年。

² そのため、しばしば「遺書」と呼ばれる。

³ NESTLE-ALAND, *NOVUM TESTAMENTUM GRAECE*, Ed. XXVII, Deutsche Bibelgesellschaft, Stuttgart, 1993.

ローマの信徒のみなさんへ⁴

1

〈挨拶〉

1 キリスト・イエスの僕⁵、神の福音のために特に選び分かれたれ、召されて使徒となったパウロから⁶——2 神の福音は、聖書の中でその預言者たちをとおして予め約束されたものであり、3 御子⁷に関するものです。御子というのは、肉によればダビデの子孫から生まれ、4 聖なる霊によれば死者たちの復活によって力ある神の子と任命された、わたしたちの主イエス・キリストのことです。5 この方をとおして、わたしたちは、すべての異邦人の間にその方の名のための信徒⁸の従順をもたらし恵みと

⁴ PROS RŌMAIOYS。直訳では「ローマの人々へ」。名宛人が信徒集団すなわち教会であることは確実なので、むしろ「ローマ教会のみなさんへ」あるいは「ローマの信徒のみなさんへ」が内容に即している。協会訳、フランシスコ会聖書研究所訳は「ローマ人への手紙」。新共同訳は「ローマの信徒への手紙」。

⁵ 「神の僕」という自己認識は、ユダヤ的伝統の枠組みの延長線上にある。フィリピ1章1節では同労者テモテもパウロ自身とともに「キリスト・イエスの僕」と呼ばれている。旧約聖書では、ネヘミヤ1:6, 11; 詩編19:11, 13; 27:9, 31:17 ほか。

⁶ 原文は単に主格。ローマの信徒の前で朗読されているこの手紙の差出人がパウロであることを示す。2節から6節までの挿入を越えて、7節「ローマにいるすべての、神に愛されている、召されて聖なる者とされたすべての人々へ」に続く。

⁷ 原文は名詞「子」に神を受ける代名詞がついた形。直訳は「その子」「彼の子」「その方の子」等。

⁸ 従来の訳語は周知のとおり「信仰」。ただしパウロにおける *pistis* の訳語の問題はそれほど単純ではない。端的に言えば *pistis* がわれわれのものか、イエスのものかによって「信仰」と訳すべきか「忠実」と訳すべきか（あるいはそれ以外の訳語を見出すべきか）、少なくとも訳語というレベルでは、異なってくる。双方に共通して適用しうる相応しい訳語を決定するのは困難に思われる。本稿では、暫定的にイエスの場合には「信徒」と訳しておく。翻訳上の難題は *eis hypakoēn pisteōs* をどう訳すかである。協会訳「信仰の従順」、新共同訳「信仰による従順」、フランシスコ会聖書研究所訳「信仰によ

使徒職をいただきました。6 この異邦人の中に、召されてイエス・キリストのものとなったあなたがたもいるのです——7 ローマにいるすべての、神に愛されている、召されて聖なる者とされた人々へ。わたしたちの父である神と主イエス・キリストから恵みと平安があなたがたに（ありますように）。

〈ローマでの宣教の願い〉

8 最初に、わたしは、イエス・キリストをとおして、あなたがたすべてについてわたしの神に感謝します。それは、あなたがたの信仰が全世界に告げ知らされているからです。9 実際、わたしの全霊を尽くして⁹、御子の福音においてわたしが仕えているわたしの神が証人¹⁰です。どんなにわたしは絶え間なくあなたがたを思い起こしていることでしょうか。10 わたしの祈りのときはいつでも願っています、何とかしていつかは、神の意志によって首尾よくあなたがたのところに行くことができるように、と。11 わたしはあなたがたに実際に会うことを切望しています。それは、あなたがたにいくらかでも霊的賜物を分け与えて、あなたがたが力づけられることを願っているからです。12 お互いの間にある、つまりあなたがたのものでもありわたしのものでもある信仰をとおして、あなた

る従順」，青野汰潮訳（岩波版）「信仰の従順」，本田哲郎訳「信頼をもってあゆみを起こす素直さ」。

⁹ 直訳は「わたしの霊において」。しかし、語感的には「全身全霊を尽くして」に近いように思われる。因みに、「わたしの全霊を尽くして、御子の福音において、わたしが仕えている」の部分の他の訳は、協会訳「わたしが霊により、御子の福音を宣べ伝えて仕えている」、新共同訳「御子の福音を宣べ伝えながら心から（神に）仕えています」、フランシスコ会聖書研究所訳「わたしがおん子に関する福音を告げながら、心から仕えている」、青野汰潮訳（岩波版）「私の霊において、〔また〕その子〔について〕の福音において私が礼拝している」、本田哲郎訳「神の子の福音を告げ知らせることをもって、わたしは（神に）心底仕えています」。

¹⁰ 「神が証人です」は馴染みの訴え表現。サムエル上 12：5 f.，レビの遺訓（『十二族長の遺訓』の第三男レビの部）19：3，ヨセフス『ユダヤ戦記』I. 595，参照。

がたの間で共に励まし合いたいのです¹¹。13 わたしは、あなたがたに知らずにいてほしくありません。兄弟のみなさん、他の異邦人の間でもそうだったようにあなたがたの間でも何らかの實りを得るべく、わたしは何度もあなたがたのところへ行こうと企てましたが、今日に至るまで妨げられたままです。14 ギリシア人にも非ギリシア人¹²にも、知者たちにも無分別な者たちにも、わたしには責務があります。15 それで、わたしの切なる望みは、ローマにいるあなたがたにも福音を宣べ伝えることなのです。

〈福音の力〉

16 わたしは福音を決して恥としません。なぜなら、それは神の力であって、すべて信じる者には、ユダヤ人をはじめギリシア人にも、救いをも

¹¹ 12節 (touto de estin symparaklēthēnai en hymīn dia tēs en allēlois pisteōs hymōn te kai emou) は比較的訳し難い箇所である。協会訳「それは、あなたがたの中において、あなたがたとわたしのお互いの信仰によって、共に励まし合うためにほかならない」。新共同訳「あなたがたのところ、あなたがたとわたしが互いに持っている信仰によって、励まし合いたいのです」。フランシスコ会聖書研究所訳「そちらに行って、あなたがたをわたしの信仰によって励ますだけでなく、わたしもあなたがたの信仰によって励まされたいのです」。青野汰潮訳(岩波版)「それは、あなたがたと私の双方が互いに抱いている信仰によって、あなたがたのうちであって、共に励まし合うことである」。本田哲郎訳「あなたたちのところで、あなたたちとわたしがお互いに、神に信頼してあゆみを起こすことで、ともに励まされたいものです」。

¹² barbaroi。語源的に擬声語であることはよく知られている。「非ギリシア人、外国人、未開人、野蛮人、蛮族、夷狄」等。14節のギリシア人と非ギリシア人が対になっている言い回しは広く流布していた。この表現にもヘレニズム文化を受容したディアスポラ・ユダヤ人としてのパウロの顔がうかがえるだろう。しかしながら、彼が用いる二分法が終始一貫しているわけではない。16節に出る「ユダヤ人をはじめギリシア人にとっても」のギリシア人は「非ユダヤ人」を指す。14節はむしろ「異邦人の使徒」の宣教対象の区分と考えられるだろう。15章22節以下に出るイスパニア宣教計画を考慮すると、「非ギリシア人」はイスパニアの人々を指すか。H. Balzによる項目 Barbaros (『ギリシア語 新約聖書釈義事典 I』教文館, 1993年, 237-238頁) 参照。

たらずものだからです。17 神の義は実にそのなかに、信徒にはじまり信仰をもたらす¹³ ように表されています¹⁴。「義しい者は信仰によって生きる」¹⁵ と書かれているとおりです。

〈人間の罪〉

18 実際、神の怒りは、不義によって真理を阻む人間どものあらゆる不信心や不義に対して、天から表されています。19 なぜなら、神に関して知りうることは、彼らには明らかだからです。神が彼らにそれを明らかに示されたのです。20 神の目に見えない属性、すなわち神の永遠の力と神性は、世界の創造以来、被造物に認識できるものであることが知られており、彼らに弁解の余地はありません。21 なぜなら、彼らは神を知りながら、神を賛美も感謝もせず、逆に彼らの思いは虚しくなり、彼らの心は暗く無分別になりました。22 彼らは自ら知者と名乗りながら愚かになり、23 朽ちない神の栄光を、朽ちる人間、そして鳥や四足獣や地を這うものの像と似たもの¹⁶ と取り替えました。

24 それゆえ、彼らを神は、彼らの心の欲望のままに、彼らの体を互いに辱める不品行に委ねました。25 この者どもは、神の真理を虚偽に替え、創造者を排除して被造物を崇め礼拝したのです。創造者こそ、永遠に誉

¹³ pistis にはじまり pistis をもたらす (ek pisteōs eis pistis) ように。最初の pistis は pistis Iēsou Chrsitou という場合の pistis, すなわち、イエスの十字架・血・贖罪死を意味するもの、二番目の pistis はイエスをメシアとして受容する信仰と、ひとまず受け止めておきたい。3章 21節～26節のパウロ自身による pistis の意味の敷衍・展開を参照。

¹⁴ apokalyptetai。「表されています」、「啓示されています」等。

¹⁵ 新共同訳は「正しい者は信仰によって生きる」。ハバクク 2:4 の引用。パウロはガラテヤ 3:11 でも同じ文章を引用する。因みに、新共同訳のハバクク 2:4 は「神に従う人は信仰によって生きる」。日本語—ギリシア語—ヘブル語の対応を示すと、正しい(義しい)者—dikaios—tzadik, 信仰(信徒)—pistis—emunā, である。

¹⁶ 申命記 4:15～18, 詩編 106:20, エレミヤ 2:11, 知恵の書 12:24 参照。なお、偶像崇拜に関しては知恵の書 13～15章で集中的に論じられている。

め讃えられるべき方です、アーメン!¹⁷

26 それゆえ、彼らを神は恥ずべき情欲に委ねました。実際、その中の女たちは自然な性的関係¹⁸を自然に反するものに替え、27 同様に男たちも女との自然な性的関係を捨てて、互いに情欲を燃やし男が男に恥ずべきことを行ない、彼らの迷妄の当然の報いを自分の身に受けたのです。

28 そして彼らが神をしっかりと認識することをよしとしなかったので、神は彼らを無益な思いに委ね、結果的に彼らは不適切なことを行ない、29 あらゆる不義、邪悪、貪欲、悪意に満ち、嫉妬、殺意、争い、欺瞞、悪習で溢れ、陰口を言う者、30 誹謗する者、神を憎む者、傲慢な者、高慢な者、大法螺を吹く者、悪事を企む者、親に不従順な者、31 無分別な者、不誠実な者、情に欠ける者、無慈悲な者¹⁹となっています。32 彼らは、このようなことを行なう者が死に値するという神の義の定め²⁰を知っていながら、自らそれらを行なうばかりでなく、同じことを行なう者たちに賛同しています。

¹⁷ ユダヤ的頌栄の典型的な踏襲。サムエル上 25：32，サムエル下 18：28，列王上 1：48，8：25，詩編 41：13，トビト 3：11，8：5，等。2 コリント 1：3 も参照。

¹⁸ 「自然な性的関係」と訳したのは *tēn physikēn chrēsīn* (対格形) である。既訳としては、「自然の関係」(協会訳，新共同訳)，「自然の〔性的〕交わり」(青野汰潮訳)，「自然な関係」(フランシスコ会聖書研究所訳)，「自然にそなわる役割」(本田哲郎訳)。文脈からパウロが性的関係を語っているのは明らかである。背景にはレビ記 18：6～23，20：10～21 に記される逸脱した性的関係があるだろう。1 コリント 6：12 以下，7：2 以下，ガラテヤ 5：19 f.，参照。

¹⁹ 29～31 節の言わば悪徳表は，マタイ 15：19 および並行箇所，ルカ 18：11，1 コリント 5：10 f.，6：9 f.，2 コリント 12：20，ガラテヤ 5：19～21 等を想起させる。

²⁰ 原文は *to dikaiōma tou theou*。dikaiōma は，dikaios, dikaiosynē, dikaoō, dikaiōs, dikaiōsis 等同様 dikē を語源とする。

2

〈神の正しい裁き〉

1 それゆえ、人を裁くすべての人よ、あなたに弁解の余地はありません。というのは、あなたは他人を裁くことで実は自分自身に有罪宣告しているからです。裁いているあなたも同じことをしているのです²¹。2 しかし、わたしたちは知っています。神の裁きが真理に従って、このようなことを行なう人たちの上にあることを。3 ああ、このようなことを行なう人たちを裁きながら自分でも同じことを行なう人よ、あなたは神の裁きを逃げおおせるとでも考えているのですか？ 4 それとも、神の慈愛と忍耐と寛容の豊かさを軽んじて、神の慈しみがあなたを悔い改めに導くことを知らずにいるのですか？ 5 あなたの頑迷さと悔い改めない心の故に、あなたは自分自身のために、神の怒りと義しい裁きの表される日²²の、その怒りを蓄えているのです。6 神は、「その人の業に従って各々に報われるでしょう」²³。7 すなわち、善い業を忍耐強く行なうことによって栄光と誉れと朽ちないものを熱心に求める人々には永遠の命を、8 分派争いを好む者どもや真理に従わず不義に従う者どもには怒りと憤りを（もって報われるのです）。9 悪を行なう人間のすべての魂の上には、ユダヤ人をはじめギリシア人の（魂の）上にも、苦難と困窮とが、10 善を行なうすべての人には、やはりユダヤ人にもギリシア人にも、栄光と誉れと平安とが（与えられます）。11 なぜなら神の判断に依怙臆はしないからです。

²¹ マタイ 7：1～5 参照。「人を裁くな。あなたがたも裁かれないようにするためである。あなた方は、自分の裁く裁きで裁かれ、自分の量る秤で量り与えられる。あなたは兄弟の目にあるおが屑は見えるのに、なぜ自分の目の中の丸太に気づかないのか。兄弟に向かって『あなたの目からおが屑を取らせてください』とどうして言えようか。自分の目に丸太があるではないか。偽善者よ、まず自分の目から丸太を取り除け。そうすれば、はっきり見えるようになって、兄弟の目からおが屑を取り除くことができる。」

²² ゼファニヤ 1：14 以下、2：2、レビの遺訓 3：2、ソロモンの詩編 9：5 等参照。

²³ 箴言 24：12、詩編 62：13、マタイ 16：27、2 コリント 11：15 等参照。

12 実際、律法と無関係に罪を犯した²⁴人はみな、律法と無関係に滅び、律法にあって罪を犯した人はみな、律法によって裁かれるでしょう。13 なぜなら、律法を聞く人たちが神の判断に照らして義であるのではなく、むしろ律法を行なう人たちが義とされる²⁵はずだからです。14 律法を持たない異邦人が、律法の命じる事柄を自然のままに行なう時は、律法を持たないその人たちが自身が自分にとって律法なのです。15 これらの人々は、律法の業が彼らの心に書かれていることを示しています²⁶。彼らの良心がそのことの共同証人であり、心の様々な思いが互いに告訴したり弁護したりしているのです。16 (このことは) わたしの福音に従えば、キリスト・イエスをとおして神が人間たちの隠れた事柄を裁かれる、その日に (明らかにされます)。

〈ユダヤ人と律法〉

17 さて、もし、あなたが自らユダヤ人と称し、律法に拠り頼み²⁷、神を誇りとし、18 御旨を知り、律法から教えられて大事なことがらを判別で

²⁴ 原文は *anomōs hēmarton*。協会訳「律法なしに罪を犯した」、新共同訳「律法を知らないで罪を犯した」、青野汰潮訳「律法なしで罪を犯した」、フランシスコ会聖書研究所訳「律法を持たずに罪を犯した」、本田哲郎訳「律法とは無縁の人が道をふみはずしたなら」。本田哲郎訳『ローマ／ガラテヤの人々への手紙』に付された「新しい訳語・言い回しの試み」は「罪・罪を犯す」という用語の理解に対して傾聴に値する示唆を含んでいる。「道を誤った」、「逸脱した」、「罪を犯した」等が考えられる。

²⁵ 「聞く—行なう」の対比については、マタイ 7:21「わたしに向かって、『主よ、主よ』という者が皆、天の国に入るわけではない。わたしの天の父の御心を行う者だけが入るのである。」を参照。「行なう」は *poieō*。

²⁶ エレミヤ 31:33「来るべき日に、わたしがイスラエルの家と結ぶ契約はこれである、と主は言われる。すなわち、わたしの律法を彼らの胸の中に授け、彼らの心にそれを記す。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。」イザヤ 51:7「正しさを知り、わたしの教えを心におく民よ。」なお、良心に関しては、知恵の書 17:11、ルベンの遺訓 4:3 等参照。

²⁷ バルク黙示録 48:22 f.「わたしたちはあなたに頼りきっています。ごらんのとおりにあなたの律法をにぎっています。あなたの契約を固守する限りたおれることはないことをわたしたちは知っています。異教徒といりまじらない限りわたしたちはつねにしあわせです。」参照。

き、19 自分自身が盲人たちの道案内²⁸、闇にある者たちの光、20 無分別な者たちの指導者、幼い者の教師、知識と真理の具体的な姿を律法の中に持っている者と自負しているとすれば、(どうして)21 あなたは他人を教えておきながら自分自身を教えないのですか？ 「盗むな」と説教しておきながら²⁹ 盗むのですか？ 22「姦淫するな」と言っておきながら姦淫するのですか³⁰？ 偶像を忌み嫌いながら聖具を盗むのですか？ 23 律法を誇りとしているあなたが、実際には律法違反によって神を冒瀆しているのです。24 まさしく「神の名は、あなたたちの故に、異邦人の間で汚されている」³¹と書かれているとおりです。

25 割礼は、あなたが律法を行なうならば、なるほど有益です³²。しかし、あなたが律法の違反者ならば、あなたの割礼は無割礼になってしまいます。26 それゆえ、無割礼(の人)が律法の義の定め³³を守るならば、その人の無割礼は割礼と見なされる³⁴のではないですか？ 27 生まれが無割礼でも律法を全うしていれば、文字と割礼に拠りながら律法の違反者であるあなたを裁くでしょう。28 なぜなら、目で見えて分かるのがユダヤ人であるわけでもなく、また目で見えて分かる肉に刻まれたものが割礼であるわけでもないからです。29 むしろ、隠れたところでそうである者こそユダヤ人であり、文字ではなく霊における心の割礼³⁵こそ割礼なの

²⁸ マタイ 15：14「彼らは盲人の道案内をする盲人だ。盲人が盲人を道案内すれば、二人とも穴に落ちてしまう。」参照。

²⁹ 「宣教する」と通常訳される *kēryssō* が使われている。

³⁰ 詩編 50：16～21、特に 18 節「盗人を見ればこれにくみし／姦淫を行う者の仲間になる。」参照。

³¹ イザヤ 52：5「…わたしの民はただ同然で奪い去られ、支配者たちはわめき、わたしの名は常に、そして絶え間なく侮られている、と主は言われる。」エゼキエル 36：20 f.「彼らはその行く先の国々に行って、わが聖なる名を汚した。事実、人々は彼らについて『これは主の民だ。彼らは自分の土地から追われてきたのだ』と言った。そこでわたしは、イスラエルの家が行った先の国々で汚したわが聖なる名を惜しんだ。」等、参照。

³² ガラテヤ 5：3 参照。

³³ 原文 *ta dikaiōma tou nomou*。1：32「神の義の定め」参照。

³⁴ 1コリント 7：19 参照。

³⁵ 申命記 30：6、エレミヤ 4：4、9：25、ヨベル 1：23、参照。

です。人間からではない、神からの賞賛は、そのような人のものです。

3

1では、ユダヤ人の優れた点は何でしょうか？あるいは割礼の有益な点は何でしょうか？2あらゆる点でたくさんあります。第一に、神の言葉が託されたことです。3これは一体どういうことでしょうか？もし、ある者たちが忠実ではなかったとして、彼らのその不忠実が神の忠実を無効にするのでしょうか³⁶？4そんなことは決してありません。とにかく、神は真実な方、としなさい。人間の方がみな偽り者なのです³⁷。次のように書かれているとおりにです。

「あなたが、あなたの言葉において義とされ、

また、あなたが裁かれるとき勝利を収めますように」³⁸

5しかし、「もしわたしたちの不義が神の義を証明するのであれば、どう言おうか？怒りを下す神は不義ではないのだろうか？」³⁹わたしは人間的な言い方をしています。6しかし、決してこのようなことはありません。もしそうであれば、どうして神がこの世界を裁く⁴⁰のでしょうか？7また（こうも言われます）、「もし神の真理がわたしの虚偽のうちに豊

³⁶ 「忠実ではなかった」は *apisteō* のアオリスト形、「不忠実」は *apistia*、「忠実」は *pistis* のそれぞれの訳である。「不誠実—誠実」の対で訳す例（新共同訳、フランシスコ会聖書研究所）、「不実—真実」の対で訳す例（青野汰潮）、「不真実—真実」の対で訳す例がある。

³⁷ 詩編 116：11 参照。

³⁸ LXX 訳詩編 50：6。新共同訳「あなたは、言葉を述べるとき、正しいとされ、裁きを受けるとき、勝利を得られる。」フランシスコ会聖書研究所訳「仰せになる言葉について、あなたは正しいとされ、人々から裁かれるとき、あなたが勝利を得ますように。」青野汰潮訳「あなたが、あなたの〔もろもろの〕言葉において義とせられ、また、あなたが裁きをなさることにおいて、勝利を得られるであろうために。」

³⁹ “ ”で括った文章は、パウロが予め想定した反対者の問いで、それを自分が論駁する形式をとっている、所謂ディアトリペー。

⁴⁰ 神による世界の裁きの義しさはイスラエルの民にとって疑いようの真実であった。創世記 18：25、申命記 32：4、ヨブ記 34：10～12 参照。

かに溢れ、神の栄光が示される⁴¹ ののであれば、どうして他でもないこのわたしが、今なお罪人として裁かれるのであろうか？” 8それから、これはちょうどわたしたちが中傷されていることですが、ある者たちの話によれば「善いことが生じるように、悪いことをしようじゃないか」とわたしたちが言っているとのことです。この者たちにこそ、裁きは相応しいのです。

〈義しい人は一人もいない〉

9では、どうでしょう？ わたしたちは優れているのでしょうか？ 全くそうではありません。実際、わたしたちが先に告訴したとおり、ユダヤ人もギリシア人もすべて罪のもとにあります。10それは次のように書かれているとおりです。

「義しい者はいない、一人もいない⁴²、

11 悟る者はいない、

神を熱心に探し求める者はいない。

12 だれもが道を逸れ、役立たずになった。

慈善を行なう者はいない、

ただの一人も [いない]⁴³。

13 彼らの喉は開いた墓、

彼らはその舌で人を欺き、

その唇の下には蝮の毒がある⁴⁴。

14 彼らの口は呪いと苦味に満ち⁴⁵、

15 彼らの足は血を流すに速く⁴⁶、

⁴¹ この箇所を敢えて説明的に訳せば、「もし神の真理がわたしの虚偽のうちに豊かに溢れ、その結果、神の栄光が現実のものとなるとすれば」となるだろうか。eis tēn doxan autou をどう訳すかであるが、直訳では意味が分かりにくい場合は敢えて思い切った訳をするしかない。

⁴² コヘレトの言葉 7：20、詩編 14：1～3；53：2～4 参照。

⁴³ 11～12 節について LXX 訳詩編 13：2～3 参照。

⁴⁴ LXX 訳詩編 5：10 および 139：4 参照。

⁴⁵ LXX 訳詩編 9：28、詩編 10：7 参照。

⁴⁶ 箴言 1：16、イザヤ 59：7 参照。

- 16 破壊と悲惨が彼らの道にはある⁴⁷，
 17 そして平和の道を彼らは知らなかった⁴⁸。
 18 神の畏れは彼らの目の前に⁴⁹ ない。」

19 ところで、わたしたちが知っているとおりに、すべて律法が言うことは、律法に拠る人々に対して告げているのであり、すべての口が塞がれて全世界が神の審問に服するようになるためです。20 なぜなら、律法の業によってはすべての肉は神の前で義とされない⁵⁰ からです。実際、律法をとおして（得られるの）は罪の認識です。

〈信従による義〉

21 しかし今、律法と無関係に、神の義が、律法と預言者たちによって証言されつつ、表されました。22 すなわち、イエス・キリストの信従をとおして信じる者すべてに及ぶ神の義⁵¹ です。違いは全くありません。23

⁴⁷ イザヤ 59：7 参照。

⁴⁸ イザヤ 59：8 参照。

⁴⁹ 「彼らの目の前に」という表現は、ヘブル語表現を踏襲するもの（所謂セミティズム表現）。「神に対する畏れは彼らにはない」の意味。

⁵⁰ 詩編 143：2，ガラテヤ 2：16 参照。

⁵¹ 原文は、dikaiosynē de theou dia pisteōs Iēsou Christou eis pantas tous pisteuontas である。議論は「イエス・キリストのピステイス」をどう理解するかをめぐるものである。従来の伝統的解釈は Iēsou Christou という属格を目的格的なものとして捉え、「イエス・キリストを信じる信仰」（協会訳）、「イエス・キリストを信じること」（新共同訳）、「イエス・キリストへの信仰」（フランシスコ会聖書研究所訳、青野汰潮訳）、「イエス・キリストに信頼してあゆみを起こすこと」（本田哲郎訳）のように訳してきた。しかし、日本でも近年、主格的属格説が主張されている（清水哲郎、原口尚彰、太田修司）。筆者も、直後に続く 26 節までのパウロ自身による「積み重ね表現法」（清水）による敷衍から見ても、主格的属格説が妥当な解釈だと考えている。ルターの「信仰義認」説の影響が余りにも根強かったと言うべきか。主格的属格説の日本における議論については、特に以下の文献を参照のこと。太田修司「Pistis Iēsou Christou — 言語使用の観察に基づく論考」『聖書学論集 26』日本聖書学研究所、1993 年、132～163 頁；同「ガラテヤ書における『イエス・キリストの信実』」『日本の聖書学 1』ATD・NTD 聖書注解書刊行会、1995 年、123～146 頁；原口尚彰『パウロの宣教』（聖書の研究シリーズ 50）教文館、1995 年；清水哲郎『パウロの言語哲学』（双書 現代の哲学）岩波書店、2001

すべての人が罪を犯し神の栄光に欠けているからです。24 人が義とされるのは、全くの賜物であり、キリスト・イエスにおける贖いをおした神の恵みによるのです。25 このキリストを⁵² 神はその血における信徒をおした宥めの供え物として供えました。それは、既に為されてしまった罪を見逃すことによってご自身の⁵³ 義を示すためでした。26 神は忍耐して来られたのです。それは、今というこの時にご自身の義を、すなわちご自身が義しい方であり、またイエスの信徒に抛る者を義とする方であることを示すためでした。

27 それでは、誇りはどこにあるのでしょうか？ 誇りは締め出されたのです。どんな法⁵⁴ によってでしょうか？ 業の、ですか？ 違います。信徒の法⁵⁵ によってです。28 なぜなら、わたしたちは、人は信徒によって、律法の業とは無関係に義とされると考えるからです。29 それとも、神はユダヤ人だけのものですか？ 異邦人のものでもあるのではないですか？ まさしく、異邦人の神でもあります。30 神が一であれば（当然です）。この（一なる）神が割礼を信徒によって、また無割礼をやはり信徒によって義とするでしょう。31 それでは、わたしたちは律法を信徒によって役立たずにするのでしょうか？ いや、決してそうではありません。むしろ、わたしたちは律法を確立するのです。

年。私は、太田の「信実」の背景にある理解ではなく、清水の「イエス自身が取った態度」としての「信」の理解を支持する。

⁵² 原文では、直前のキリスト・イエスを受ける関係代名詞の対格（目的格）形 hon。

⁵³ 「ご自身の」と訳したのは人称代名詞的に用いられる強意代名詞の属格形。26 節も同じ。26 節の「ご自身が義しい方であり」は einai（不定詞）+ 同じ代名詞の対格形 + 形容詞の対格形。

⁵⁴ 「法」と訳したのは nomos。「律法」も同じ nomos であるが、ここは「法則」（協会訳、新共同訳、青野汰潮訳）、「原理」（フランシスコ会聖書研究所訳）、「基準」（本田哲郎訳）等の意味。

⁵⁵ 「信徒の法」という場合の「信徒」も 22 節に出る「イエス・キリストの信徒」つまり 24～26 節でパウロ自身が明確にその意味を規定しているそれ以外ならない。28 節「人は信徒によって、律法の業とは無関係に義とされる」の「信徒」も 30 節～31 節の「信徒」も同様であって、所謂われわれの信仰それ自体ではない。もちろん、信仰者の信仰は、他の何ものでもなくそこにこそ根拠を持つのではあるが。

4

〈アブラハムの模範〉

1 それでは、肉に従ってわたしたちの父祖であるアブラハムは何を見出したとわたしたちは言うのでしょうか？ 2 実際、もしアブラハムが業によって義とされたのであれば、彼は誇ることができるでしょう。しかし、神に向かってそれはできません。3 聖書はどう言っていますか？「アブラハムは神を信じた。そしてそれが彼に対して義と認められた」⁵⁶のです。4 ところで、働く人⁵⁷に対しては、報酬は恵みではなく、むしろ当然支払われるべきものと看做されます。5 しかし、働かずに信じる人に対しては、不信心な者を義とする方を信じる限り⁵⁸、その信仰が義と看做されるのです。6 ちょうど、ダビデも、神が働き（業）とは無関係に義と看做した人の幸いを次のように言っています。

⁵⁶ LXX 訳創世記 15:6 の引用。マソラ・テキストとパウロ自身が引用した LXX 訳との間には微妙なずれが見出される。前者は「アブラムは主を信じた。そして彼はそれを自分にとって義しいことと思った」と訳しうるが、後者において後半部分の動詞が能動相から受動相に変わり、後半部の意味が結果的に「それは彼にとって義しいことと思われた」という意味の他に、「それが彼に対して義と認められた」という意味をも十分に担う可能性が開けたように思われる。ユダヤ教においては、アケダット・イツハク（イサクの縛り）におけるアブラムの従順がこの解釈に決定的な影響を与えている。パウロもファリサイ派の律法解釈の訓練を受けた者として、この解釈の枠内で考えている。なお、マソラ・テキストの当該箇所の意味については、月本昭男訳『旧約聖書 I 創世記』岩波書店、1997 年、42 頁、参照（「彼はヤハウエを信じた。そして彼は、それが自分にとって義しいことだ、と考えた」）。

⁵⁷ 「働く人」は *tō ergazomenō*（与格形）。3 章 28 節に出る「律法の業」*ergōn nomou*（主格形は *erga nomou, pl.*）の「業」を語源とする動詞の分詞形。青野のように「業」との関係を示すために「業をなす者」と訳すことも可能だが、4 節はもっと単純に、働く人にとって報酬は当然の権利であって、恵みとして感謝すべきものではない、という意味であろう。4 節は、労働市場の雇用関係における社会通念を周知の例として語った挿入句である。

⁵⁸ 直訳すると「不信心な者を義とする方を信じる働かない人に対しては」となる。原文の 4 節初めと 5 節初めが見事に対応している（*tō de ergazomenō* ……; *tō de mē ergazomenō* ……）のを生かしたかったので、敢えて「信じる」を二度繰り返して意識した。

「7 幸いだ、その不法が赦され、
その罪が覆い隠された人々は。

8 幸いだ、その罪を主が認めない人は。」⁵⁹

9 それでは、この幸いは割礼に対するものでしょうか、それとも無割礼に対するものでもあるのでしょうか？ 実際わたしたちは言っています、「アブラハムに対しては、信仰が義と認められた」と。10 それでは、どのようにして、認められたのでしょうか？ 割礼を受けた状態でしたか、それとも無割礼の状態⁶⁰でしたか？ 割礼を受けた状態ではなく、無割礼の状態でした。11 しかも、彼は無割礼の状態で信仰の義の証印として割礼の印を受けたのです。こうして、彼は無割礼の状態で信じるすべての人の父となり、彼らに対して[もまた][その]義が認められることになったのです。12 そして、彼はまた、単に割礼に拠る者たちに対してだけでなく、わたしたちの父アブラハムの無割礼の状態での信仰の足跡に倣って歩む者たちに対しても、割礼の父となったのです。

13 というのは、世界の相続人になるという、アブラハムあるいは彼の子孫に対する約束は、律法をとおしたものではなく、むしろ信徒の義をとおしたものだからです。14 なぜなら、もし律法に拠る者が相続人であるなら、信徒は無駄にされ、約束は廃止されたこととなります。15 実際、律法は怒りを生み出すもので、律法のないところには違反もない⁶¹のです。16 このことの故に、ことは信徒によるのです。それは恵みに従ってことが運び、約束が、すべての子孫に対して、すなわち、律法に拠る者だけでなくアブラハムの信仰に拠る者に対しても、確固たるものとなるためです。アブラハムこそわたしたちすべての父ですが、17 それは、「多くの民の父としてわたしはあなたを立てた」⁶²と書かれているとおりで、

⁵⁹ LXX 訳詩編 31：1～2 の引用。新共同訳等は 32：1～2 参照。

⁶⁰ ここで「割礼を受けた状態」、「無割礼の状態」と訳したのは、それぞれ en peritomē と en akrobystia である。新共同訳は「割礼を受けてから」、「割礼を受ける前」と訳している。意味としては「割礼を受けた後」「割礼を受ける前」であろう。アブラハムに対する割礼の指示については創世記 17：10～11 参照。

⁶¹ 1：18；3：20；5：13，20；7：8，10～11，13；ガラテヤ 3：19 参照。

⁶² LXX 訳創世記 17：5 の引用。シラ書 44：19 参照。

彼が信じた、死者たちを命ある者とし、存在しないものを存在するものとして呼び出す⁶³ 神の御前でのごことでした。18 彼は、希望に反してはいっても、希望に基づいて信じた結果、「あなたの子孫はこのようになるだろう」⁶⁴ と言われていたとおりに、多くの民の父となりました。19 そして、彼は、ほぼ百歳になっており、自分の体が [既に] 死んだも同然であること、またサラの胎が死んだ状態であること⁶⁵ を十分知りながらも、信仰が弱まりませんでした。20 むしろ逆で、神の約束を不信仰によって疑うことをせずに、却って信仰によって強められ神に栄光を帰しました。21 それに彼は確信もしていたのです、神は約束したことは実現することもおできになる、と。22 だからこそ、それが彼に対して義と認められたのです。23 しかし、「彼に対して認められた」ということは、彼だけについて書かれているわけではなく、24 むしろわたしたちについても書かれています、わたしたちの主イエスを死者たちの中から立ち上がらせた⁶⁶ 方を信じるわたしたちに対しても必ずや認められるのです。25 イエスは、わたしたちの違反の故に引き渡され、わたしたちの義のために立ち上げられたのですから。

5

〈信従によって義とされた者〉

1 ですから、わたしたちは信従によって義とされて⁶⁷、わたしたちの主イエス・キリストをとおして神に対して平和を持っています⁶⁸。2 このイエス・キリストをとおして、わたしたちは [信従によって] この恵みに入ることができましたし、この恵みの中にしっかりと立って神の栄光に与

⁶³ バルク黙示録 48：8，イザヤ 48：13 参照。

⁶⁴ LXX 訳創世記 15：5 の引用。

⁶⁵ 創世記 17：17；18：11～12 参照。

⁶⁶ 原文は egeiranta。egeirō（「目覚めさせる」、「起こす」。転じて、「引き起こす」、「立ち上がらせる」、「蘇らせる」、「復活させる」）の 1 aorist 分詞、三人称単数男性対格形。

⁶⁷ ガラテヤ 2：16 参照。

⁶⁸ イザヤ 32：17；53：5 参照。

る希望を誇っています。3 いや、それだけではありません。わたしたちはむしろ苦難の中にあっさえ誇っています。それは、わたしたちが知っているからです、苦難が忍耐を、4 忍耐が練達を、練達が希望を生むということを。5 希望はわたしたちを欺きません⁶⁹。なぜなら、わたしたちに与えられた聖霊をとおして、わたしたちの心の中に神の愛が注がれている⁷⁰からです。6 実際、キリストはわたしたちがまだ弱かったとき、定められたまさにその時に、不信心な者たちのために死んでくださいました。7 義しい人のために死ぬ人は殆どいません。善人のためなら勇敢に死ぬ人もあるいはいるでしょう。8 しかし、神はご自身の愛をわたしたちに対して示されました。すなわち、わたしたちがまだ罪人だったときに、キリストがわたしたちのために死んでくださったのです。9 それゆえ、今わたしたちは彼の血において義とされたのですから、なおさら一層、彼をとおして怒りから救われるでしょう⁷¹。10 もしも、わたしたちが敵であったときに、御子の死をとおして神と和解させていただいた⁷²のであれば、なおさら一層、和解させていただいたわたしたちは御子の命にあって救われるでしょう。11 いや、それだけではありません。わたしたちの主イエス・キリストをとおして、わたしたちは神を誇りとしています。今わたしたちはこのキリストをとおして和解を勝ち得たのですから。

〈アダムとキリスト〉

12 このゆえに、一人の人をとおして罪が世界に入り込み、罪をとおして死が入り込んだように、まさにそのようにして、すべての人間たちのうちに死が到達しました。すべての人が罪を犯して⁷³死に向かったためです。13 実際、律法が与えられる前に罪は世界の中にありました。しかし、律法がなければ罪は誰の責任になるわけでもありません⁷⁴。14 しか

⁶⁹ 詩編 22：6；25：20 参照。

⁷⁰ ヨエル 3：1～2，シラ書 18：11 参照。

⁷¹ 「彼の血」については 3：25，「怒り」については 1：18 をそれぞれ参照。

⁷² 2 コリント 5：18～19 参照。

⁷³ 3：23 参照。

⁷⁴ 4：15 参照。

し、アダムからモーセまでの間は、アダムの違反と同類の罪を犯さなかった者たちをも、罪は支配しました。アダムは来るべき方の予型⁷⁵です。15ところが、違反と恵みの賜物はまったく違っていました⁷⁶。実際、一人の人の違反によって多くの人が死ぬことになったとすれば、神の恵み、つまり一人の人イエス・キリストの恵みにおける贈り物は、なおさら一層、多くの人に溢れるほど与えられました⁷⁷。16この贈り物は、罪を犯した一人の人によるものとは全く違っていました。というのは、裁きの場合は、違反一つでも有罪とされます⁷⁸が、恵みの賜物の場合は、多くの違反があっても義とされる⁷⁹からです。17実際、もし一人の人の違反によって、死が一人の人をとおして支配したとすれば、なおさら一層、恵みと義の贈り物とを溢れるほど豊かにいただいた⁸⁰人々は、一人の人イエス・キリストをとおして、命にあって支配するでしょう。18こういうわけで、一人の人の違反をとおしてすべての人間が有罪宣告を受けることになったのと同様に、一人の人の義をとおしてすべての人間が命の義の宣告を受けることになりました⁸¹。19というのは、一人の人間の不従順をとおして多くの人々が罪人とされたのと同じように、一人の人の従順をとおして多くの人々が義しい者とされる⁸²からです。20ところで、律法が横から入り込んできたのは、違反が増し加わるため⁸³でした。しかし、

⁷⁵ 「予型」は typos。

⁷⁶ 直前の14節でパウロはアダムを来るべき方、すなわちキリストの予型として提示した。ところが違反（アダム）と恵みの賜物（キリスト）とでは、その意味するところは対極的なのである。「恵みの賜物」は charisma。

⁷⁷ 1コリント15：21～22，45参照。

⁷⁸ 第4エズラ7：118～9参照。（新共同訳の旧約聖書統編および日本聖書学研究所編『聖書外典偽典5旧約偽典Ⅲ』に収録されている。）

⁷⁹ イザヤ53：11～12参照。

⁸⁰ 直訳は「恵みと義の贈り物との溢れるほどの豊かさを受けた」。

⁸¹ この文章も対応が見事（hōs di henos……, houtōs kai di henos……また paraptōmatos eis pantas anthrōpous eis katakrima, ……dikaiōmatos eis pantas anthrōpous eis dikaiōsin zōēs）である。二つの eis の訳し方の工夫が味噌か。

⁸² イザヤ53：11参照。

⁸³ 4：14参照。

罪が増し加わったところには、恵みがなお一層豊かに溢れ出たのです。
21 それは、罪が死によって支配したのと同じように、恵みもまた義をと
おして支配し、わたしたちの主イエス・キリストをとおして永遠の命に
導く⁸⁴ ためです。

⁸⁴ 6：23 参照。